

### 第3回瀬戸市まち・ひと・しごと創生推進会議 議事録

▽日 時 平成27年9月29日(火) 10:00~12:00まで

▽場 所 瀬戸市役所庁舎4階 庁議室

▽出席者 (順不同、敬称略)

[瀬戸市まち・ひと・しごと創生推進会議委員]

横井暢彦、寺田聡、水野貴久枝、成田一成、丹羽誠、山中俊博、熊谷由美、宮内美穂、水野和郎、岡崎信久、牧 治

[市]

市長 伊藤保徳、行政経営部長 加藤仁章、行政経営部参事兼経営課長 高田 佳伸、行政経営部参事 涌井康宣

▽欠席者 (順不同、敬称略)

[瀬戸市まち・ひと・しごと創生推進会議 委員]

山田基成、中桐淳美

▽議題等

- (1) 市長挨拶
- (2) 瀬戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略の立案に関する意見交換
- (3) その他

▽議事内容

事務局から、議題2「瀬戸市まち・ひと・しごと創生推進会議委員からのアイデア整理について」、資料の確認程度の説明がなされた。

議題2:「子ども、女性、教育」をテーマに、瀬戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略の立案に関する意見交換

〈水野貴久枝座長〉

座 長: 本題に入らせていただく。

今回の会議は、子ども、女性、教育をテーマに意見交換をすることとなっているが、その前に私から少しお話をさせていただきます。

私は、結婚16年目で春日井から嫁に来た。主人が30歳で親元に帰り、主人の母親と一緒に暮らすことになった。また、10年前に出産した際に、子育てしながらだと会社にも迷惑かけると思い、勤めていた旅行会社を退職する選択をした。その後、子どもが幼稚園の時に産業課が携わっている瀬戸しごと塾の8期生として勉強させていただき、そして去年起業。男女共同参画について、市の代表として県の会議に参加した。

最近、ジェンダーフリーが浸透し、瀬戸市のシステムもよくなってきた。子どもが病気の時など病院の隣であずかってもらえたり、主人の会社も休みが取りやすくなったり、システムが変わってきた。これからもっともっと男女共同参画が進むと思うが、子どもを産めるのは女性、女性より力仕事ができるのは男性に変わりはないが、性差を乗り越えたやる気、可能

性を認めてお互いが気持ちよく生活できるようにと強く思っている。

それでは、皆さんにご発言をお願いしたい。

〈成田委員〉

委員：今の若い人はお金がないので、なかなか結婚や子育てができない。それより年寄りの方が、お金があるらしい。今後年寄り社会になって、年寄りから孫への贈与で税金が免除されたりするため、若い人は先祖を敬い、親に金をやろうかと言わせるような努力もしないといけない。一般社会も一緒に、皆で助け合う仕組み、子育てや思いやりのある社会になるといい。

〈水野貴久枝座長〉

座長：瀬戸市も核家族が進んでおり、世帯数は伸びているけれども、子どもの数は減っている。私も主人の母親と暮らし、助けてもらう分、我慢もあるが、楽しいことの方が多い。地域のおじいちゃんおばあちゃんと関わると、子どもがやさしくなる。二世帯を推進するようなお話が出てくるといい。

〈水野和郎委員〉

委員：当社の職員は1400人弱だが、来年の3月に300人以上の事業所は、女性管理職が何パーセントか必要となる。2020年には30%の女性管理職をつくる予定。罰則規定はないが、270人ぐらい管理職のうち70人ぐらい女性を管理職に登用しないとといけないが、現状は5人しかいない。女性管理職の確保ということに頭を悩ませている。できればいい話を聞かせていただきたい。もう一つ、地元でフェスティバルをやっているが、11人のうち男性が4人しかいないのにテントを6本張らなくてはいけない。一方で、お年寄りの綱引きをやると言ったら2回やらないといけない。少子高齢化はそこまで進んでいる。私の町内は小学生が1人いるだけ。お嫁に行かない人が増えている。昔は婚活等の世話をやく人がいたが、現代では、我々が言うとは今はセクハラとか言われてしまう。まちの中に何かあるといいのか考えたとき、うちの嫁は近くに同じような友達がいなくて、パーティに行っている。ママ友を見つけているので、そういったことの拡充をしてもらえるといい。我々の頃と違って、町内に1人しかいないと友達がなかなかできにくい。

〈水野貴久枝座長〉

座長：確かに2050年問題で、今は2.7人で1人のお年寄りを支えているのだが、20年後には2人で1人の65歳以上のお年寄りを支えていかなければならない。私の子どもが40歳くらいになった時には、年金一人分を一人が納税しなければならない。私もやっと危機感を持った。一般のお父さんお母さん、若い人はこういった情報がないのではないかと。よそから人口を持ってくるのは大変なことだが、その辺りが課題。

〈岡崎委員〉

委員：女性の働き方、活躍が重要になる。女性だけに限らず外国人等の活躍も必要。一方で男女雇用機会均等について、男女の賃金格差はまだ縮まっていない。そういうことを克服しないといけないし、瀬戸にある企業では推進して欲しい。一方で、ハラスメント問題がある。労働組合でも相談が近年多くなっている。パワハラ、マタハラ等いろんな相談がある。そうした問題を解決することを誰がやるのか、それは企業なのか、行政なのか、社会なのか、安心して安全に働ける環境をつくって、そこに勤めていただく。ソフトウェア開発は女性が進出しやすい分野だと思うので、瀬戸市でモデル地区をつくり、安心して働けるエリアにして外から人を呼び込めたらいい。

〈水野貴久枝座長〉

座長：モデル地区はすぐできるものなのか。

〈岡崎委員〉

委員：工場ではないので、できると思う。ソフトウェア開発に必要なインフラが整備されていれば、山奥でも静かな環境で仕事に邁進できるようだ。定光寺でも可能。

〈寺田委員〉

委員：見方を変えると、賃金格差がなくなった故に、女性が自立しやすくなり、結婚しなくなったという考え方も実はある。ある意味、男女共同参画で考えれば良いこと。実際、女性が結婚したいと思えないテレビドラマが流行り、結婚式場があきらめ婚承ります等の雰囲気がある。まちとして、結婚したい、ここに住みたいというまちづくりが必要。赤津の小学校は1クラスだが、そこで子どもを育てたいかどうか。更に、町内の役員がすべて回ってくる。一方で、教室が足りないところもあり、格差がある。今の学校の人口密度は西高東低の状況だが、子育て環境を整える見方がいるのではないか。また、子育てしている女性たちが輝くと、自分たちもこうなりたいとなるための情報発信をしていくべきではないか。

〈横井委員〉

委員：私は、子供会連絡協議会をしている。今回の会議全体の課題は人口減少。その中でも労働人口を増やさないといけない。女性の人口、若い人が瀬戸に留まるにはどうしたら良いかという点が課題。女性が輝く社会として行くにはどうしたらいいのか、色々な政策を打っていくと、人口減少に歯止めをかけるのはなかなか難しい。すべての産業サービスが70%になるとすれば、それはかなり厳しい状況。支援が必要とはいうものの、あれもこれも支援を重ねるとかえって厳しい方向にいく。なるべく予算をかけず、現状を踏まえてできることを議論できるといい。女性が結婚して子育てをすることを考えると、経済的、環境の問題あるが、働きながら子育てできることについて、企業内で託児する等、企業と一緒に場づくりを考えられればいい。一時の手当や目先のものととらわれずに、社会に送り出す役割があるので、明るい未来が見える社会をつくるのが、一番の子育て支援ではないかと思う。

〈水野貴久枝座長〉

企業内での託児所という話が出たが、それについてどう考えるか。

〈丹羽委員〉

委員：資料3について、最も重要なことが欠けている気がした。それは、女性が子どもを産むのも育てるのも、働くのも、家庭内の夫の理解が必要なところ。現代は3組に1組が離婚する状況で、女性が安心して輝くには、家庭が落ち着ける場であることが重要。夫婦関係の仕組みに目を向け、瀬戸市として、改善して行くために、男女の脳の訓練が必要。中学で性差があることを教え、お互いの考え方や必然性を教えていくと助け合い方がわかるようになる。結婚する時はいいが、その後のことを教育する。すれ違いが減り、男性の理解に繋がるのではないか。

資料2について、もう一つ含めたいのは、子どもの学力や能力を高めるファクターを加えること。理由は、共働きや少子化になる要因として、子どもの養育費、教育費の高さで、中でも学校や塾などの要因がある。教育費が安いと、沖縄のように出生率が高い。親は子どもの職業の選択肢が広がることや、将来の生活安定のために高い教育を受けさせようとするので、そのようなニーズに応えられるよう瀬戸の事業を見直すといい。子どもの負担にならないように。具体的には、学童の対象年齢では、小学校1年から中学1年くらいまで。中学1年は環境変化で落ちこぼれやすいので、それをフォローできたらよい。学童は遊びなど行事で情操教育ということだと思うが、学習を助ける指導員などにおいて、退職教員、会社を退職した人材、楽器・習字が得意な人や、近隣の教育系の学生などを活用し、能力アップなどを図る。学童で学力的なアップもできる。そうすると各家計の負担も少なくなり、子育てにも子どもを産もうというメリットもでてくる。地域のお年寄りの手を借りることによって、お年寄りの生きがいにもなるし、地域ぐるみで子どもの成長を見守っていける。

〈水野貴久枝座長〉

座長： 学童の話が出たが、掛川小学校で初めての試みだが、地域ボランティアが30人位登録して運営している。定年した方等が教えるのはハードルが高いが、最初は遊びながら情操教育等、地域の力を借りてできることからやっている。素敵な話だと思った。  
夫の協力について、どうして離婚が多いかというと、相手を尊敬できなくなり、認められない時にすれ違いが出てきてしまう。女性は色んな事をいっぺんに軽く考えてできるが、男性は視野が狭くなりがち、違うということを中学生ぐらいになったら理解できる教育を入れていただきたい。

〈熊谷委員〉

委員： 資料3のすべての女性が輝く政策パッケージについて。市役所でも、家族介護等で辞めてしまう職員もいる。私は子どもが3人いるが、結婚する時には色々な人に助けてもらおうと親との同居を考え、就職は、子育てしながら働ける公務員を選んだ。ちょうど私が入った時に男女雇用機会均等法の年で、市役所の職員は平等になっているが、民間では結婚した時に女性は辞めてしまう。なぜかという、家庭の協力が得られない。子どものことを蔑ろにした家庭は何処にもないが、会社は遅くまで残業させ、職員は土日にも会社に行っている。そこを解消しなければ何も進まない。1つの市でできることではないかも知れないが、ここかなと思う。当たり前のように男女が働き、子どもは色々な人に育ててもらい、なるべく早めに帰って子どものために家庭で過ごす。企業はバリバリ働く人しか認めない風潮がある。定時に仕事を終わらせるために、どう効率よく働けるかを考えるのだが、民間では定時に帰る人は「えっ」と思われる。その意識を民間の人に変えてもらわないといけない。すべての企業が定時に終わり、お母さんたちも短い時間でもいいから少しでもお金を確保し、家庭の時間を楽しめるような政策を考えないといけない。  
ワーク・ライフバランスを市役所がまずやらないといけないが、民間にも有給休暇の取得義務化を整備するとか、優良企業を認める表彰などしないと少しも進まない。また、どうしたら起業できるかというキッカケがわからない、地域の方も色々な技を持っている人がいるが、どこでどう繋がっていけばよいかわからない。そういう人が沢山いるので、政策としてコーディネーターの養成、地域ボランティア養成講座等をやっていくことで、少しずつでも変わるという。

〈水野貴久枝座長〉

座長： 効率よく働くのは大切だが、残業することは美しいという文化もあったりする。主人の会社は、毎週水曜日は家庭の日で残業せず帰りなさいということで19時位には自宅に帰ってくる。週に1日だが息子も楽しみにしていて、その日は手伝いをしてくれる。家族の仲がよいと、犯罪が少ないというアンケートを見ることがあるが、そういう施策があることはいいこと。

〈成田委員〉

委員： 製造業は指導を受けているが、ノーワーク、ノーペイは駄目なので、きちんと働いて成績を上げた人には払うようにしている。ブラック企業の飲食店等と一緒にしてもらおうと困る。業種によるが、私たちの会社は設備関係なので、皆さんが休みの日時に仕事をしなければいけなかったりすることもあるが、それは経営者のモラル。難しいところだが、会社は無茶なことをしていないが、限度がある。

〈水野和郎委員〉

委員： 確かに昔はそういうところがあった。このところ、随分働き方が変わってきた。残業も10分単位で付くし、上司も「早く終わらなさい」と言っている。産休や時間休も取りやすくなってきたし、最近では男性の産休も出てきた。民間企業でも進んできている。こうした環境づくりは企業側も求められている。徐々に進んでいくと思う。

私は、月に3店舗くらい回って一般職員と対話するが、保育所をつくってくれという意見が多い。それは難しいところだが、やりたい部分も多いところ。ただし、支店に1つずつつくとすると、対象者の女性が5人くらいだし、そもそも既婚女性がいないところではニーズは無い。詳しく状況を聞いてみると、4月5月に子どもが生まれると、何ヶ月間か保育所に入れない状況があるようだ。行政の方で工夫してもらい、余ってれば入れてもらえるシステムがあると助かるのではないか。対象者が50人いるような企業なら作れるが。待機する期間が10カ月になる方がいるので、行政で対応していただくといい。

〈成田委員〉

委員： マンションの下に保育所があつて、預かってくれるところがある。女性は子どもを持つのが最も大事な仕事、育てるといっても大変な仕事だ。一方で、働くには可愛いけど邪魔になるから、働きながら預けられるパートのような仕事の人たちで、グループづくり順番に子どもの面倒をみるなどやっていると聞いた。我々が市に要求しても予算がかかるので、優先順位の問題だろう。瀬戸の赤津の日東工業の進出が上手くいかなかった。日東が来ていれば瀬戸に働く場所があつた。工業団地もいっぱい、そこで何が大事かというところ中小企業。大きな会社を引っ張るのがよいのではなく、働く人の手助けになる仕組みが必要。市にお金を使わせたらサービスも悪くなるので、工業団地でもそうだが、綺麗な工場、綺麗な工場が混在しているが、もっと市民のモラルを高めないといけない。中小企業の何か助けになるような教育の拡充、人口が減らないのはお金があること、税金があつてまちに活気があるのいい。

〈横井委員〉

委員： もう1つ、女性の視点での話が議論されたが、対象が300万円の壁といわれているように、対象を考えないと、瀬戸にいて生み育てることができない。様々なサービスがあるが、資料3のように政策パッケージがあるが、瀬戸っこみらい計画など様々な施策がある。サービス合戦になると予算の問題がある。政策としては素晴らしいので維持しないといけないが、最もここで落ちているのは、市民全体の意識ではないかと強く思う。企業でみれば前回提案したCSRレポート。それぞれの企業の中でこうやっていると示す。誰かがやってくれるのではなく、1人1人が自分でできること、家族、地域の視点において、政策をうっていかないとサービス合戦になってしまう。

〈山中委員〉

委員： なぜ、子どもが減ったかを考えたら、豊かな社会になったが地域コミュニティが無くなった。豊かさばかりを求めたその代償として弊害がでてきているかと思う。富山県の三世代同居家庭は、子どもの出生率が高い。そこには昔の日本のいい風習があつて、三世代住んでいところは出生率が高い。女性は男性よりもできる仕事沢山ある。男性より女性にやってもらったほうがいい仕事がある。会社としての責任は、子どもを産んでもらい、なおかつ働ける環境づくり。難しいことであるが、自宅でもできる仕事を探してみると結構ある。子育て期間はできるだけ、そういう所で頑張ってもらい、夏はヨーロッパは夏時間があるように、日中は暑いから、そういうことも企業は取り入れないといけない。行政には2人目、3人目に対して今も助成はやっているとは思いますが、何らかの行政しかできないことをやってもらえると、もっと生みやすい環境ができる。

5人に1人が鬱病といわれる社会で、企業側にもいろいろな問題がある。行政機関は深夜まで電気が点いていて残業やっていると結構ある。国や県の上の方ほどやっている。民間企業は競争があるからいちがいに言えない。

〈牧委員〉

委員： この会議のテーマは、瀬戸市に人を増やし、生みやすいまち、よそから来てもらえるまちにするか。これまでは、介護保険制度ができて高齢者に手厚いが、子どもにお金をかけていないのが現状。プールがやすらぎ会館になる等、子ども施設が老人施設に変わってきている。介護レンタルは安い、子どもに対して凄く厳しい。若い夫婦が、子どもを持つことが大変だと躊躇するのではと思う。フランスでは、法律を充実、最も大きいのは出産に一時金を出している。お金は投資で、経済効果がいくらあるかを考えたら、効果があるのでは。瀬戸市は大々的にやっていることを打ち出してもらえれば、それを見て、瀬戸にいる人は子どもをつくりたいと思うし、よその市町の人はこちらの市町があると興味をもってもらえる。行政間の取り合いをやれと言うこと。いかにアピールするか、よその人が見て、すごいことをやっていると感じられるような、今あるものをピックアップしてPRしてもらえるといい。今、会社内婚活を推進する企業が増えているそうだ。それは良い事なので、瀬戸にずっと住んでいってもらえる施策を考えてもらいたい。

〈岡崎委員〉

委員： 将来を担う子ども達を生むか、外から呼び込んでいくことが重要。例えば、学校教育の中で、外国語教育、グローバル人材育成に特化した教育ができないか。ここに来たらそういう教育が受けられる等。学校のパソコン教育で、今の子は使うことに長けているので、例えば、民間とタイアップしてプログラミングなどをやれる教育をする等。仕組みを学んで、その企業が瀬戸にあればその企業に就職する。子ども達を残す施策を考えて欲しい。

〈宮内委員〉

委員： 私は若い子たちと過ごす時間が長い、若い子達はもっとしたたか。女子学生は、旦那の給料では生きていけないので、私も働くというのが当たり前、男子学生もそう思っていて、ダブルインカムが当然になっている。それをどうバックアップをするかだけ。資料2は、盛りだくさんのメニューがあるように見えるが、気になるのは、ハード面の使い勝手がいいかどうか。骨子案の4章の評価指標のところ、利用者の女性に限った調査をする等してほしい。実際はそうなっているのか、洗い出しが必要。資料3のタイトルは、すべての女性が輝くと書いてあるが、高齢者の女性の視点が全くない。これは子どもを産む40歳代位までをすべての女性と言っているようで、50歳代になると女性ではないということになり、少しさみしくなる。高齢者と50歳代は違うが、労働者、担い手として入れ込んでいく、子どもの手が離れた人の起業とか、もう少し年齢が上の人の視点を入れていかないと、すべての女性とタイトルを打つのは欠けていると思う。

〈水野貴久枝座長〉

座長： 確かにそうだ。

〈水野和郎委員〉

委員： 70人の管理職を5年間でつくっていかないといけないがどう思うか。

〈宮内委員〉

委員： 今の若い子達は出世したいという気持ちが強い。

〈水野和郎委員〉

委員： 本当に職場で活躍したいと思っている女性が、どのくらいの割合いるのか。

〈熊谷委員〉

委員： 公務員は、暇そうに思われるかもしれないが、産業医に指導されたり、鬱病になった人もいたり、土日残業したり、そういう責任を持った仕事をやり切ろうとしている。私は、おじいちゃんやおばあちゃんのフォローがあったので良かったが、病後児保育や、会議で帰れないという事態になったとき旦那が行ってくれるのか、社会として全体的に考えないといけない。

子育てを終えた高齢者の方々が見守りしてもらえる制度をつくることで、高齢者を介護事業の対象にするのではなく、支援者として育てていくのも良いと思う。男の人は、家庭を顧みていないと思う。父子家庭は子どもをみななければいけない。主体性の違いがある。

〈成田委員〉

委員： 以前、空き家を改築してバグパッカーが泊まれるような場の話を聞いたが、そういうところを利用して、高齢の方に子どもをみてもらえる施設等もあればよい。中国は、女性は職場で男性と同等扱いで、50歳で定年らしい。中国は子どもができると親に預けるというケースがほとんど。日本で働いている人で中国に子どもを置いてきている人もいる。国も違うしそういう面では仕組みは違うのだが、預かるのに便利などところがあるといい。

〈宮内委員〉

委員： 保育ママという制度がある。名古屋市でさえ数十人程度しか保育ママがいない。もう少しこの制度を活用して、空き家提供するとか。

〈丹羽委員〉

委員： 男性と女性と考え方の違いがあって、昔から男は外に出て狩りをしていた。現代は収入を得てくると信じてやってきたところがある。それは女の人にとって違うということである。そういう考え方の違いがあることを早い段階で中高生の時に教えることが必要。会社で女性を課長にしたいと声をかけるのだが、引き受けてもらえない。同性の中で、1つ頭が抜けるということは、年上の女性より上になること、引き受けられないということがある。これもだんだん変わってくるのではないかと思うが、女の人には交渉でも絶対ひかないところがあり交渉に適したところもあるし、ルーティンの仕事をこつことやれることから安心して任せられる。

〈牧委員〉

委員： データバンクをつくってもらい、保育士や看護師の免許を持つ今働いていない人を登録して、派遣してくれたら、直ぐ使うと思う。

〈横井委員〉

委員： 地方創生について誤解がよくあるが、それは国から何かをなささいというわけではなく、最終的には瀬戸のまちをどうするのか、総合計画の中、短い期間で資料をまとめて出さないといけない。KPI指標をきっちり出さないといけない。会議が4回では厳しいが、最終的な数値としては労働人口。その数値が維持できないと瀬戸市にとってマイナス。瀬戸市で確実にできることに絞り込まないと難しいのでは。

〈水野貴久枝座長〉

座長： 労働人口ということだが、私が思ったのは、子どもが希望すれば大学などで外に出すことはある。その子たちが瀬戸に魅力を感じて最終的に戻ってきたい、愛着のある瀬戸で生活したいとなるのが最も人口が増える。市に貢献したいという子と、いい思いができるから瀬戸に来たいという子とでは基本的に貢献度が違う。生まれ育った子ども達が戻ることが理想。

〈成田委員〉

委員： それは理想だけど難しい。まちを愛してくれる人が増えないといけない。窯業は大切にしていけないといけない。イベントもあるし、瀬戸やきそばもある。計画で沢山書いたがやらないのはいけない。

〈水野貴久枝座長〉

座長： 最も良いのは、まちで育って地元の企業に勤めて活躍するということ。

〈横井委員〉

委員： この中ではどうてい無理なことで、この会議のアイデアから汲み取っていただいて。でないといけない。

〈牧委員〉

委員： 気になるのは骨子の 12 ページの「にぎわい」。次のページの地域ブランディングの瀬戸まるっとミュージアムの進化があるが、ミュージアムといわれると見せるだけに思えるので、進化させるのであれば、市民総キャストとか、パフォーマンスをしながら掃除をすとか、新しいものを考えて欲しい。もう 1 点は 20 ページの市役所改革プロジェクトで、市の方にもっと外に出ていってもらいたい。どんどん成功事例など意見を拾ってきてもらい、県や国のパイプになる人をつくってもらいたい。

〈水野貴久枝座長〉

座長： ありがとうございます。では市長から最後に一言を。

〈伊藤市長〉

伊藤市政の中で 1 つの売りは、市役所の大改革。市役所から変わらないとダメだということ。動いてみせることが重要。女性幹部の登用、現在の仕事のやり方そのものをどう変えていくか、必ずしも市役所に答えがあるのではなく、現場に答えはある。ただ、市長就任からの 5 か月間は猛烈に忙しかったので、10 月からはなるべく職員に同行して、政策の周知や活動を一緒に行いながら、市役所に対して良い刺激を感じ取っていきたいと思っている。

また、資料 4 にメモという形で皆さんの発言を全部プロットしている。これを見ながら計画的なこと、戦略的な言葉に移し替えている。これらのアイデアは、永久保存で宝物だと思っている。戦略的なものをつくることと、具体的な行動計画に落とし込むことは、私の頭の中で完全に分けている。大きな方向性、物の考え方、事業の狙い目を戦略の中になるべく多く書き込んで、どういう状態になったら成功したか否かという指標をセットしていきたい。

一方、具体的な市役所の行動は中期計画等、その後の 10 年計画の中に、年度でどんなことが到達するか、10 年間で到達するが、初年度にどれだけの費用を使って、どういう手を使って等、PDCA を 1 年単位で回せるようにしたいと思う。戦略的には 5 年、10 年というスパンで PDCA を回さなくてはいけないので、指標や目標値を一応のアウトプットが出来た段階で、番外でお時間が許せば皆様にお集まりいただいて報告したいと思う。その時に、PDCA を 5 年で回すもの、10 年で回すもの、1 年間で完結するものの違いや、年単位で税金を最も効果的に使う手法も説明できるようにしたい。12 月になるか微妙なところだが、事務方と話をし、精力的に頑張りたいと思う。

〈水野貴久枝座長〉

座長： 予定の時間がきたので、今回はここまでで終了したい。

ご議論ありがとうございました。

事務局から、次回は 10/30（金）10 時～の開催を連絡。

今回までの意見交換を踏まえて骨子案の第 4 章、第 5 章を作成したうえで、第 4 回会議 1 週間程度前を目標に、各委員に資料の事前送付を行う予定。

併せて、市長発言を受けて、最終報告書の内容報告の場として第 5 回を開催することとし、その日程は第 4 回の開催通知時に案内する。

以上